

探訪 埋もれた大山道を辿る

天野 賢一

はじめに

人々が往来する場所を「道」という。その初源は人類の歴史とともに形成されてきた最も古い遺構と言えるであろう。そして道は時代を経ても、同じ場所に踏襲され続ける傾向がある。しかしその時々の様々な理由によつて移り変わつていくこともある。機能的で合理性に富むニュータウンを突き抜ける道は、どこか足になじまない。昔の匂いが漂う古道や旧街道を散策すると心地良いのは、足の裏から感じる歴史の重みがあるからであろう。そんな昔の風景を想いながら近世に賑わいをみせた大山道を辿つてみたい。

近世大山詣りと大山道

近世の道は、東海道に代表される五街道や脇往還などの

主要道がある。近世に賑わいを見せ、18世紀中頃の宝暦年間とそのピークを迎えた大山道は、関東地方のみならず甲信越静方面も含めて広くその信仰を集め、陸路のみならず相模湾からの海路も含めて多くの参拝者を迎えている。関東平野一円の各地を網羅するよう張り巡らされた大山道は、大河の流路のように合流を繰り返しながら目的地へ至る経路の集約点が大山の麓に所在する伊勢原である。

また大山参拝は大山詣りの他、富士講においても富士山と併せて經由する場合や東海道方面往来の折に立ち寄る場合がある。大山の帰路では、江ノ島・鎌倉などの名勝地を訪ねる場合も多く、その経路は多様である。

主な経路は、東海道戸塚の柏尾不動堂から戸田で相模川を渡る「柏尾通り」、東海道藤沢四谷から田村で相模川を

渡る「田村通り」や、江戸赤坂を起点とし東海道の脇往還である矢倉沢往還を主体とする「青山通り」で、その他にも平塚宿から相模平野を北上する経路や甲州街道を結ぶ八王子道などがある。「青山通り大山道」は、矢倉沢往還から伊勢原市田中の咳止橋付近で分岐し大山に至る。江戸と

大山を結ぶ最短経路で、現在の東京都港区赤坂・青山・渋谷区渋谷・世田谷区三軒茶屋を抜け、多摩川を二子の渡しで渡河して、川崎市高津区溝の口・横浜市青葉区荏田・緑区長津田・大和市下鶴間・海老名市国分を経て、相模川を厚木の渡しで渡河する。そして厚木市愛甲・伊勢原市下糟屋を経て咳止橋付近で矢倉沢往還から分岐し、上粕屋石倉橋付近で「田村通り」と合流し、大山へ到達する。

矢倉沢往還は、古代の官道であった東海道の足柄峠を越えて、矢倉岳の麓を通り抜けている。駿河・相模・武蔵を抜ける交通網は、東海道を基軸に整備されていくが、矢倉沢往還も変遷しながら中世段階でも踏襲され続け、近世では、東海道脇往還として整備されたと考えられる。そして途中

に大山が位置することから、江戸中期に大山詣りの経路として盛んに利用され賑わいを見せることとなった。

埋もれた大山道

各地からの大山道が交差する要衝の一つが、現在の石倉橋交差点付近である。これまで「青山通り」と「田村通り」がそれぞれクランク状に合流し、子易に抜け大山門前へ向かっている。その経路にはいくつかの謎があり、近年行われた発掘調査でその実像が浮かびあがりつつある。平成23年度に行われた発掘調査（報告書は本文末で引用文献とした資料）は、石倉橋交差点の東側にあたり、興味深いことに奈良・平安時代、中世、近世と各時代の道が発見されている。

古代の大山道

奈良・平安時代の道は、幅30cmの硬化面が轍のように三条は並び、一条は斜方向に交差している。断片的な確認で

経路の詳細は明らかではないが、軸線は大山を目指している。大山阿夫利神社は、延喜式神名帳に記載された式内社で、安産祈願で著名な子易明神と呼ばれる子易比比多神社（**図1・写真1**）や三之宮比々多神社も諸説あるが同様に式内社である。発見された道は、これら式内社と国府・古代寺院を結ぶ経路の一つである可能性が高い。

中世の道（**写真2**）は、やはり大山を目指すよう地形に沿って緩い勾配を持ちながら、幅60cm前後の硬化面が現在は畑地境となっている部分で発見されており、その名残を現在でもとどめていると言える。延長距離は8.6mであるが、「青山通り」の延長線上にあること、側溝を持つ道であ



図1 『明治前期手書彩色関東実測図』（大住郡上粕屋村）の挿図に表現された上粕屋村比々多神社



写真1 現在の上粕屋比比多神社（往時の景観が偲ばれる）



写真2 発掘された中世の道と現在の「青山通り大山道」

ることの二つの特徴がある。発掘調査では、その構築時期は明らかでないが、側溝出土の陶磁器と北宋銭から中世に帰属する遺構である。このことから「青山通り」は、中世期では現在のように屈曲せず、直線的に延びていたと考えられる。発掘調査では、一七〇七（宝永4）年の宝永火山灰降灰期では既に埋没していたことが把握でき、近世前中期に経路の移動があったことが想定できる。

中世では、関東各地に見られる「鎌倉街道」に象徴されるよう交通路はかなり整備されている。鎌倉期では、源頼朝が大山阿夫利神社のご神体となる自然石の石尊社・石尊宮を敬い、毎年佩刀を奉納し天下泰平・武運の長久祈願を行ったことは著名である。また北条政子が、頼朝三回忌に建立した縁起をもつ石蔵山浄業寺は、石倉橋交差点西方に流れる鈴川の対岸に所在する。また太田道灌暗殺の地となった戦国期の「糟屋」は上粕屋にあたり、その確信的な場所は未だ明らかではないが、扇谷上杉氏本拠地が所在し、関係する拠点として伊勢原市・平塚市域にまたがる岡崎城、



写真3 大山を目指す、現在の「青山通り大山道」と千石堰用水

藤沢市所在の大庭城などと連絡する交通路も整備されている。発見された道はこの交通網の一端を示すものであろう。もう一つの特徴の側溝は、現在でも「青山通り」と平行して流れる千石堰用水（写真3）の延長線上にあたり、その旧流路であると考えられる。千石堰用水は、自然地形の谷を挟んだ北側の台地に所在する扇谷上杉定正氏居館の空

堀に引水できるよう構築された用水路といわれ、その構築に縁のある太田道灌の名を冠し「道灌堀」と呼ばれている。用水路を開削する上では道が必要であり、側溝は

「青山通り」と同時期の所産と考えられる。

近世の大山道

近世の道（写真4）は、現在の県道「T」字路である石倉橋交差点を突き抜けるような位置で発見されている。幅

7.5mと大規模で、断面形は逆台形である。延長距離は45m余り確認され、東端部は中世の道を壊していることからそれ以降の構築時期で、出土遺物は、18世紀中頃遺構の陶磁器類である。位置関係から「田村通り」が「T」字路で突き当たり、大山方向に屈折せずに本来は中世の「青山通り」



写真4 石倉橋交差点付近の近世の道と現在の「旧田村通り」



図2 現在の地形と大山道の推定経路

に達して大山方向へ向かうものと仮定（図2）したが、中世「青山通り」を壊して構築していることから矛盾点もある。発掘地点からさらに東側の状況が解明されないため、詳細は不明であるが、明治期の地籍図では、社寺の表記がなされた区画に向かっていること、交差点近傍には、明治年間



図3 1876 (明治9) 年地籍図〔一部〕



図4 1882 (明治15) 年地図〔一部拡大・加筆〕

に焼失したといわれる自性寺が所在していたことなどから、寺院や墓所への参道である可能性も含まれよう。

地形図の謎

石倉橋交差点付近には、地形図の謎がある。一八七六明治9) 年地籍図(図3) では、「青山通り」は千石堰用水を伴ってクランクしながら大山へ至るが、一八八二(明治

15) 年地図(図4) では、「青山通り」が直線的に表現され、石倉橋交差点では「田村通り」が「丁」字路となって接続している。現在の県道611号大山板戸線は、直線的に延びるが大正年間に整備されたもので、当時の表記では矛盾が生じてしまったため、明治9年地籍図が本来のあり方を示し、

明治15年地図は誤記もしくは省略された表現であると理解できる。この「田村通り」の道筋は、本来、上粕屋七五三

引にあつた二の鳥居から畑地を堀割しながら直線的に延び、石倉橋交差点に向かって直角に折れ曲がる経路を有していた。前述のとおり、現在は県道として整備され、二の鳥居は移築されているが、畑地の中にその痕跡は辿ることができる。

この「田村通り」に関しては、平成25年度の発掘調査で新たな



写真5 石倉橋交差点近傍に所在していた道標
2011年1月撮影

面逆台形の堀割で、18世紀初頭の埋没と規模を縮小して作り替え、東へ経路を屈曲させていることなどが把握されている。

大山道と道標

各地からの大山道が交差する要衝の一つが現在の石倉橋交差点付近である。「青山通り」と「田村通り」が交差し、

発見があった。現在の県道611号上粕屋南金目線に準じて、石倉橋交差点に向かつて屈折するのではなく、さらに一直線で延びる。大山へ向かっていことが明らかになった。形態は断崖が連続している。正面が「ひらつか」表示となることから、大山参詣帰路の道標であるという大山道の道標として稀な特徴も併せ持っている。

帰路は分岐点となる。現在は近隣に移設されているが、本来はそこに道標があった。不動明王の鎮座する道標（写真5）は、道路拡幅など時代の波にもまれて幾度となく移設を繰り返してきたが、今もなお、人々の往来を見守るよう路傍に据えられている。道標は目的地を明示するが、左面に「右 いせ原 田むら 江之島 道」、正面「此方 ひらつかみち」、右面「はたのミチ」、裏面「左 戸田 あつき 青山 道」との銘があるが、「大山」を示していない。

おわりに

やや駆け足の古道めぐりとなってしまったが、現在の大山道と発掘調査で解明されつつある大山道を一端であるが紐解いてみた。現在の地形図で判ること、古地図での表現も併せると様々な道の移り変わりが見えてくる。そして遺

跡の発掘調査で、それらを実証できることもある。

大山道は、現在でも各地で街路としてその機能を継続しており、路傍に残る道標と共に往時を偲ばせるようにその名残を示している。その反面、近年の大規模・広域的な幹線道路の建設や土地区画整理事業などの開発によって、本来の経路が消滅している場合も多くある。取り上げた発掘調査地点及びその周辺部においても同様で、現在まで残されていた景観もしだいに失われつつある。大山道に関する近年の調査・研究では伊勢原市教育委員会で「再発見大山道調査報告書」が刊行され、大山道及び付随する道標の詳細が明らかにされている。大山山麓部を中心としている伊勢原市域の現況を詳細に調査・記録したこの報告は、今後の研究を進展させる上でも重要な情報を多く含むものといえる。日本遺産に「大山詣り」が認定され、個々の文化財が注目されるが、それらを結ぶ大山道を通して理解していくべきであろう。

【引用文献】

- 『かながわ考古学財団調査報告294「上粕屋・石倉中遺跡」
県道603号（上粕屋厚木）整備事業に伴う発掘調査』
（公財）かながわ考古学財団二〇一三年
- （※本文中で使用したすべての挿図及び写真は、本書「第七章まとめ」より転載しました。）

【参考文献】

- 『伊勢原市内の大山道と道標 再発見大山道調査報告書』伊勢原市教育委員会二〇一一年
 - 伊勢原市役所市長公室企画調整室『地図で見ると伊勢原の変遷』(市制施行30周年記念)伊勢原市役所二〇〇一年
 - 『上粕屋・石倉中遺跡(第2地点)平成27年度発掘調査成果発表会』(公財)かながわ考古学財団二〇一五年
 - 中平龍二郎『ホントに歩く大山街道』(未知の道シリーズ2)風人社二〇〇七年
 - 宮崎武雄「石倉の不動尊座像道標について大山道の変遷と不動尊座像のあった場所」『KAZESAYAGE』平
- 地編13 KAZESAYAGE 通算128号 所収) 風人社二〇一二年